

令和6年度第4回富山県総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和6年11月20日(水) 10:30～11:30
- 2 場 所 県庁4階大会議室
- 3 出席者 富山県知事 新田 八朗
富山県教育委員会
教育長 廣島 伸一
委 員 坪池 宏
委 員 大西 ゆかり
委 員 黒田 卓
委 員 牧田 和樹
委 員 松岡 理
- 4 事務局出席者 経営管理部長 南里 明日香
理事・経営管理部次長 坂林 根則
理事・教育次長 水落 仁
教育次長・教育みらい室長 中崎 健志
教育次長 小杉 健
参事・教育企画課長 板倉 由美子
学術振興課長 水上 優
県立高校改革推進課長 丸田 祐一
教育みらい室課長 嶋谷 克司
他関係課職員数名

5 議 事

- (1) 県立高校における教育振興について
○令和20年度までに実現を目指す県立高校の姿(案)
- (2) 公私立高等学校連絡会議について(報告)

6 会議の要旨

司会が開会を宣し、新田知事の挨拶後、富山県総合教育会議運営要領第3条並びに知事の指名に基づき、以後の議事については南里経営管理部長が進行した。

(1) 県立高校における教育振興について

(南里経営管理部長)

- ・事務局から資料1から資料4について説明する。

- ・丸田県立高校改革推進課長が、資料1「県立高校の基本目標」、資料2「県立高校の配置の姿」、資料3「様々な学科構成×様々な学校規模＝幅広い選択肢の提供」、資料4「令和6年度の進め方(案)」について説明した。

○委員からの意見

(坪池委員)

- ・聞きたいことが2点ある。1点目は、資料2の学科構成について、これは富山県独自で考えたものなのか、それとも、どこかのモデルがあったのか。2点目は、同じく資料2の①のスタンダードに「共通教科」という記載があるが、これは何を示しているものなのか。

(事務局)

- ・資料2に記載の普通系学科①～⑥については、独自のもの、他県の視察などを踏まえたものの両方。②のSTEAMや③のグローバルは、今後学びをさらに強化していくべきであろうという考えから記載している。④、⑤の未来創造と地域共創といった名称は独自のものという認識だが、多様なニーズに応える意図から記載している。⑥のエンパワーメントについても、様々な理由から、基礎学力をもっと高めるニーズもあると考え、独自に整理した。
- ・共通教科については、現在普通科や職業科でも行われているような一般教科をイメージしていただきたい。

(坪池委員)

- ・このまとめ方は非常に綺麗にまとめられており、時間をかけていいものになってきたと思う。今の共通教科の話で感じたのは、まず、①のスタンダードは、出口のことを考えると、一般入試の存在が大きいと思った。また、④、⑤の未来創造と地域共創では、推薦入試や総合型選抜において、在学中にフィールドワークなどによって身につけたものを志願理由にしていくことが考えられる。
- ・⑤地域共創については人口減少が進んでいくと、どの高校も広い範囲から生徒募集することとなり、今までの地域というものをどう捉えていくのか、という新たな課題が出てくる。そうなる、行政域を跨いでしまうので、各市町村と連携していたのを今後どうしていくのか考える必要がある。富山市と高岡市の高校が主だと思うが、生徒が広い範囲から入ってくるので、フィールドをどこかに指定してそれをうまく活用していくことが考えられ、都市部の高校も、今後、地域共創に取り組むことが可能性としてあるのではないかと思う。
- ・今後、これらの組み合わせを考えていくときに、需要がない区分で学科を作ると、大きな定員割れが見込まれることもあるため、それぞれ、中学生にどのような必要があるのかの把握が必要になる。
- ・アドミッション・ポリシーについて、これまで、新制高校の発足以降は、そこに入った生徒の集団や質によって方向性を決めてきた流れがある。しかし、今、こうして決めていくことで、アドミッション・ポリシーに県の意向がかなり入るこ

とになる。アドミッション・ポリシーを誰がどんな形で作っていくのかということも、検討材料としてあるのではないかと思う。

(牧田委員)

- ・⑤の地域共創について、坪池委員と同じことを考えていた。地域というものに縛られてしまうと、子どもたちの学びの自由が制限されてしまう懸念があるなど感じた。
- ・このことに関連して、資料1で基本目標を提案されたが、(1)に(2)、(3)がほぼ含まれていると思った。例えば、(3)の「富山ならではの教育」を入れてしまうと、先ほど話があったアドミッション・ポリシーやカリキュラム・ポリシーを作るときに、富山ならではのとは何だ、という話になっていく。基本的に富山県で教育をするわけだから、あえて富山らしさをクローズアップする必要はないと思う。また、(1)の「時代に適応し、未来を拓く人材の育成」という項目に、ウェルビーイングという言葉は必要だと思うので、「生徒一人ひとりの生きる力と、レジリエンスを育み、ウェルビーイングを向上させる」とすると、この1項目だけですべて成り立つし、この方が各高校でスクール・ポリシーを作るときに大きく縛られないと思うので、検討してもらいたい。
- ・資料2について、私も非常にわかりやすくなったと思った。現実として富山県と鳥取県だけが公立の中高一貫校がなく、それ以外の都道府県にはあり、早い段階で展開をしている。当然検証がなされ、結果が様々に出ているわけで、富山の遅れを取り戻す意味では、全国でどう成功し、どう失敗したのかを取り込むようアンテナを張ってほしい。後で教育委員の皆さんにお配りしたいと思うが、新潟県教育委員会で2016年に、中高一貫校の成果、そして今後10年をどうするか、というレポートが出ている。こういった報告はおそらく他都道府県でも出していると思うので、参考にして進めてもらえると、精度が上がり、より効果的な方向性を出せるだろうと思っている。

(黒田委員)

- ・これまでの議論でなかなかまとまらないのではないかと心配していたが、非常に綺麗にまとめられたと思う。特に学校数については大規模校の校数を2～3校としたことで、かなりイメージしやすくなっていると思った。どこかの高校とどこかの高校を統合するというイメージではなく、富山県の高校が新しくなり、全部が変わる、というメッセージを早めに発信し、議論を進めていくとよいと思う。あなたの高校はこういう高校ですよ、とこちら側から押し付けるのではなく、場所は近いが機能的なことを考えるともう少し別なところと手を組んだほうがよい、など新しく作ろうというような前向きな話し合いが進んでいくとよいと思った。

(大西委員)

- ・黒田委員のご発言と同様、現在34校ある高校を20校程度に再編していくということで、すべての高校が再編統合の当該校になることを、自分ごととして考えて

いかないといけない。また、未来の子どもたちにどんな教育が必要なのかということをも全ての高校で考えてもらう必要がある。

- ・学科構成を示した表は、私もとてもわかりやすいと思った。①のスタンダードを選ぶ生徒たちというのは、大学に進学したいが、明確な進路や深めたい学びを考えるのにもう少し機会と時間がほしい子どもをイメージした。高校3年間の中でしっかり考えて決めてもらうために、自分らしい生き方を見つけたり、キャリア発達を促したりなど、受験だけではなく、どう生きていくかということに主眼を置いたキャリア教育を十分に考慮してもらいたいと感じた。これはすべての高校において言えることで、子どもたちが自立するための大事な学びについて考えてもらいたいと思う。

(松岡委員)

- ・令和20年というのは、去年生まれた子たちが、高校生になったときであり、その時の世界あるいは日本、富山県の人口構成を考えると、親や祖父、祖母の世代とは全く違う状況で自己実現を果たさなければならず、大変だと思う。しかし、大きな時代の変化があってこのような新しいことをやっていくということなので、先ほど委員の皆さんがおっしゃったように、すべての人が当事者である認識を持たなければならない。大規模な学校を作ると、例えば大学進学一筋で頑張っていた子どもがふと立ち止まってしまったとしても、他の可能性を見つけてまた頑張っていける、という想定がしやすくなると思う。子どもたちが少しでも可能性を持って頑張ってもらえる学校づくりをするというのは非常によいことだと思った。

(新田知事)

- ・富山県はこれまで様々な面で最先端を走ってきて、それが本県の発展の原動力になってきたと思うのだが、先ほど牧田委員が言われたように、45都道府県にある公立の中高一貫校がないのはなぜだろうか。これは坪池委員が一番詳しいだろうと思うのだが、意見をお聞かせ願いたい。

(坪池委員)

- ・文科省が中高一貫校設置を進めてきた当初から、富山県でも検討は進めてきたと思う。個人的な見解だが、その都度、設置場所などの様々な障害があったのだと考えている。大きな流れとして、全国では特に都市部を中心に、私立の中高一貫校に中学生が流れたということがあるのではないかと。きっかけの一つは、ゆとり教育により公立高校の学習内容が減り、教育に対する需要を満たしていくことになったと思う。これは想像の域を出ないが、ゆとり教育を補完するために、文科省でも中高一貫校設置を進めていったのではないかと。現状、中学校の学習内容は、以前のものに戻ってきたので、そういう意味では今、ゆとり教育が極端に進められたときよりは中高一貫校のニーズが減っているのではないかと。また、実際に、首都圏の公立高校はだんだん盛り返している。一方で、文科省がこの後どのような動きをするかというのはわからないので、再度、ゆとり教育にシフトす

ることがあれば、富山県独自のスタンダードを示すという意味でも、中高一貫校はそれなりに機能する。中高一貫校の成果やノウハウが、一貫校ではない中学校や高校へ普及していくための実験校みたいな形にもなると思う。

(牧田委員)

- ・私の想像だが、富山県は教育に対する危機がそれほど起きなかった県なのではないかと思う。この前、県外のある中高一貫校を見てきたのだが、話を伺った方によると、学力レベルや子どもたちの生活態度がどんどん荒れてきたという教育崩壊の危機を感じ、中高一貫校設立に至ったということだった。富山県でそのようなことは起きておらず、御三家と呼ばれる高校がそれなりの進学実績を残しているため、ニーズを感じなかったことが大きかったのではないか。県民性や日本海側に位置していることなど、それらの類似性から考えると、おそらく鳥取県でも、昔からそれなりの進学実績を残せていたので、あえて先取り教育をして中高一貫校で何とか盛り返さなければいけない、という動きがなかったのではないかと思う。

(新田知事)

- ・様々な学科を作るなど、そういった微修正はこれまでもやってきた。中高一貫校というのは骨格が違い、教育制度のあり方自体に踏み込むもの。私ごとで恐縮だが、私が卒業した高校はいわゆる今で言う探究科で、3年間同じクラスの40人中、15人が東大、10人が医学部、その他も京大や東工大などに行った。50年前、そのようなところに私がたまたま紛れ込んでいたんだと思うが、今はもう舵を切るときだと思う。今変わっていかないと、富山県の子どもたちを育むうえで様々な問題が起きてくるのではないか。

(廣島教育長)

- ・今回、令和20年度までに実現を目指す、という表題にしているが、当然その間においても教育委員会としては、しっかり向上させるべきものは取り組んでいく、というスタンスでこの基本方針をまとめていけたらと思っている。資料4には今後の進め方も記載しているが、令和20年度だけではなく、その過程も考えながらやらせていただけるとありがたい。

(南里経営管理部長)

- ・ここまでの議論を踏まえて新田知事よりご発言いただきたく。

(新田知事)

- ・これまで令和20年度までに実現を目指す県立高校の姿について、本会議や県議会で議論してきた。また、学区を回るワークショップ、あるいは意見交換会でも、様々なご意見をいただいた。これらをもとに基本目標を3つ挙げたが、先ほど一

つでも十分よいというご意見もあったので、改めて検討したいと思う。

- ・「県立高校の配置の姿」は委員の皆さんから大変ご好評いただいたが、私も本当に労作だと思っており、今後このような整理で進めてまいりたい。また、先ほども議論になった中高一貫校について、6年間目的を持って、長期的な視点で学習ができるというメリットがあると考えており、設置に向けた検討を進めていければと思う。
- ・今後目指す姿について、本日いただいたご意見を踏まえ、必要な修正をし、次回の総合教育会議では、20年から5年前、10年前の姿、これらを逆算的に検討できるよう事務局で準備を進めてほしい。その後、再度ワークショップ、あるいは意見交換会を開催して、今年度末の、県立高校の基本方針の取りまとめに向け、引き続き委員の皆さんのご意見をお聞きしながら、丁寧に検討を進めていきたい。このようなスケジュール感と方向性だということを伝えさせていただく。

(2) 公私立高等学校連絡会議について (報告)

(南里経営管理部長)

- ・続いて、事務局から資料5について説明する。

〔・水上学術振興課長が、資料5「令和6年度第2回富山県公私立高等学校連絡会議の開催結果」について説明した。〕

(南里経営管理部長)

- ・以上で本日の議事を終了する。

この後、事務局より、閉会の挨拶を行った。次回の第5回総合教育会議は、1月の開催を予定している。

以上